

関東大震災と火災 上田 壽

(友の会顧問平成一九年原稿 平成二十一年死去)

大正十二年九月一日に起こった関東大震災の際は、大正七年生まれの筆者も物心がついて間もなくの時分であり、高知市の生家では正午で茶の間で昼食の食卓についていた。震源地の関東地方とは遙かに離れた高知市でも、電球の笠が揺れていたのが震度二位の揺れであったような記憶がある。間もなく号外が出て地震の被害の大きさに驚いた。

寺田寅彦全集(岩波書店)の中の日記及び書簡によると、関東大震災当日の九月一日は「朝は時化模様で時々暴風雨が襲ってきた。」雨が少し収まったので、当時開かれていた二科会の美術展を鑑賞するために、上野の美術館へ来ていたが、休憩してコーヒーをすすりながら、津田青楓氏と雑談をしていた。やがて地震が来て長く揺れていたが、流石に地震に詳しい学者だけあって、家屋の揺れ方を落ち着いて観察している。ベルリンに滞在中の小宮豊隆に出した手紙では、今度の地震は、東京ではそう大したことはなかった。家屋の倒壊よりも、火災による被害が大きい、と述べている。火災は東京府及び神奈川、千葉、静岡の各県でも発生したが、東京市の被服廠跡だけでも三万余名の焼死者を出した。寅彦はすぐさま学生達と共に、火災の模様を調べて回っているが、火災による旋風がいたる所で発生し、それが火災を大きくしたように書かれている。ところで、寅彦の資料の中に「大火災時ノ氣象状態」というカタカナ文字でガリ版刷りの印刷物があり、この手紙により大火の原因がはつきりする。

その書き出しは「大正十二年九月一日午前十一時五八分四五秒京浜地方大激震ニ伴フ火災ノ猛烈ナリシハ、一方水道破損ガ主ナル因子ナルト同時ニ当時ノ風勢ノ強烈ナリシモ大ナル補助ナリシコト何人モ知ルトコロナリ。今友ニ其当時ノ天候ノ状態ヲ叙シテ、後日ノ参考ニ資セントス。」中央気象台ヨリ、となっているが、文中の「友」は当時の気象台長・岡田武松が、友人としての寺田寅彦に送ったものである。

その資料では、大正十二年九月一日より三日までの風、気圧、気温、湿度と地震前後の火災に対する岡田台長の解説が述べられている。それによれば八月三十一日午前六時に鹿児島で台風となり、気圧は七三六ミリ(九八一HP(ヘクトパスカル))で、九月一日午前六時には若狭湾に出て、尚東北東に進行した。副低気圧が名古屋に発生し東に進み、地震直前の午前十時には、東京の北を通過し、東京において、短時間の急風猛雨あり、その際、大地震発生、地震時の一日正午の風向は南一二・三 $\frac{m}{s}$ で、この程度の風速を保ちながら西に回り更に北に回り、午後十一時には最強風北西の二一・八 $\frac{m}{s}$ に達した。そのため火事の前線は常に向きを変えながら燃え広がった。

二日午前には風も数 m/s とおさまったが「大いなる積乱雲」を生じた。その間気象台の最高温度は四六・四℃で、本台は焼失し、本館軒先より四十メートル隔たった所にあつた百葉箱内で測つたものである。

更に気温については地震のあつた前後の夜間には二十六℃程度であつたが、本台焼失の前には次第に増加し火災のため約六℃の昇温をし、一日の午後十二時には三二・七℃と高温で、二日の午前六時頃まで、この程度の気温が続いた。それに従つて湿度は八〇%台から四〇%台まで下がり、家屋や器物は大変乾燥して、火災の発生し易い状態となつた。気圧は一日午後四時には七四七・四ミリ（九九六HP）に下がり、それより上昇し始め、翌正午には七五三・八ミリ（二〇〇四HP）に達し尚上昇を続けた。

ここに指摘されているごとく、岡田台長は大火災の発生の主な原因として①水道の破損と、②台風による強風、の二つを挙げている。尚、荒川秀俊他の著書…日本史小百科「災害」（近藤出版）によるとその他の原因として③揮発物や薬品等危険物が引火爆発したり、④水面に浮遊する重油に引火し、浮かんでいる人や船を焼いた。⑤家財の路上堆積物に飛び火したり、消火の妨げになつた、などが挙げられている。